

第14回研究大会【ワークショップ】

「アクティブ・ラーニングは「夢中」になれる学習」

講師：中嶋洋一先生(関西外国語大学教授)

ワークショップは、「皆さんはアクティブ・ラーニング=ペアやグループになって何かしらの活動をする事だと思いませんか。アクティブ・ラーニングとは、脳をアクティブにし、時間を忘れるくらい没頭できる学習のことです」という穏やかで優しい中嶋先生の声で始まりました。2時間半のワークショップはあっという間に終了時間になり、誰もがもっと聞きたいと思う充実したものとなりました。

COVID-19 に世界中が翻弄される状態が続き、私達は否が応でも自分が、先行きが不透明で、将来の予測が困難な VUCA (Volatility：変動性／Uncertainty：不確実性／Complexity：複雑性／Ambiguity：曖昧性) の時代を生きていることを実感せざるを得ない日々を送っています。遠いものと思っていた Society5.0 が、そこまで来ているのです。

Society5.0 では、日常の様々な分野で AI が活用されるようになっていわれています。では、その状況で人間の存在価値はどこにあるのか。中嶋先生は、思考力、判断力、表現力、創造性、そして人を思いやる力があることをあげていらっしゃいました。

講演の中で先生が最も強調されていたことは、"Begin with the end in mind." 教師は、授業のゴールを最初にイメージして、そこから逆向き設計で授業を組み立てるべしということ。そして、学生には、ゴールを先に示して、今やっている活動が全体のどこの部分なのかを意識させるべしということです。先生は、逆向き設計の授業を「ジグソーパズル型授業」これに相對する授業を「積み木型授業」と名付けられ、それぞれの教師像を以下のようにまとめられました。これは反省するところの多い耳の痛いお話でした。

◎ジグソー型教師：学習指導案 つながりのあるストーリー型授業	◎積み木型教師：授業進行案 ぶつ切れの箇条書き型授業
「指導」と「活動」のバランスが良い。	「活動」はあるが、「指導」がない。
最後の5分は生徒の言葉で説明させている。	最後の5分は教師がまとめている。
思考させ、関わらせ、振り返らせている。	ワークシートやPowerPointなどに頼っている。

そして、AI が浸透する時代において「人間性」を高めていく指導がますます重要になると指摘され、どうすれば「心を育て、頭を鍛える外国語教育」を推進することができるか、実際に授業で使われている資料を示しながら丁寧に伝えてくださいました。

その一つ例として提示してくださったのが、作文添削での生徒とのやりとりです。ともするとすぐ朱を入れて直し一方的に言語形式を教え整えさせてしまいがちですが、先生は empathy (共感) をベースに生徒と対話をしながら、気持ちを引き出すことに注力されるそうです。気持ちを引き出し本人も気づいていない心を耕す、これが肝要だと伝えてくださいました。

講演の中で、先生が生徒を「石」に擬えて伝えてくださった言葉は、外国語教育に携わる者として心に留めておくべきことだと感じましたので、下に引用して本報告を終わりたいと思います。改めて、実践での貴重なお話を惜しみなく伝えてくださった中嶋先生に感謝いたします。(文責：戎妙子)

教師の仕事は、「石」の表面をただ削ること(言語形式の理解・定着)ではなく、その石の声(言いたいこと)に耳を傾け、石が持っている「特徴」を引き出してやることではないかと考えます。本当はどの子も、自分の内なる言葉を「結晶化」する力を持っています。

関西大学外国語教育学会共催セミナー
 「外国にルーツを持つ子どもの教育保障を考える」
 ～可児市における不就学ゼロをめざす取り組みを例に～

講師：小島祥美先生

(東京外国語大学世界言語社会教育センター / 多言語多文化共生センター准教授)

2019年、文部科学省が外国人の子どもの就学実態に関し初の全国的な調査を実施した結果、小中学生にあたる外国籍の子ども約12万4千人のうち約2万人が就学していない可能性があることが判明。国および自治体の教育行政がにわかに動き出しました。

ヒューライツ大阪とNPO法人おおさかこども多文化センターとの共催セミナーでは、文部科学省を動かす力となった岐阜県可児市での「不就学ゼロ」を目指す取り組みの中心的役割を担った小島祥美さんに、可児市での外国ルーツの子どもの教育保障を目指した実践について、関連動画をまじえて報告いただきました。

岐阜県可児市は外国人集住都市の一つです。市の教育関係者と話をするなかで、公立小学校の在籍児童数と外国人登録の数が著しく食い違っていたことから、子どもたちはいったいどこに行ってしまったのだろうかという疑問の声から2003年小島先生と可児市の協働調査が始まったそうです。

2年にわたる義務教育課程在籍相当の子どもがいる外国籍の全戸を家庭訪問することを厭わない地道かつ緻密な調査が多く数の市民の協力を呼び、最終的には市長による「不就学ゼロ」をめざす宣言に結び付いたとのことでした。

外国ルーツの子どもの教育問題は1980年代には既に顕在化していましたが、それにも拘わらず未だに改善が見られません。その原因の一つは、担当者が短期間で異動するため様々な取り組みが中断される事にあります。ところが、可児市では調査開始から15年以上経った現在でも不就学ゼロを維持できています。それを可能にしているのが、「可児市外国人児童・生徒の学習保障事業実施基準」の存在です。この実施基準には、就学手続き、就学実態の把握の仕方、体系的に指導を行っていくこと、学校の役割、コーディネーターの職務等、教育に関わる様々なことが明文化されているそうです。

明文化に尽力された小島先生は、外国ルーツの子どもの教育に携わる業務を自治体で「職務」と位置付けることが絶対に必要だと力説されていました。

報告の最後に今後の活動について問われると、小島先生は、教育保障の推進に加え、健康保障の問題改善を訴えることと答えていらっしゃいました。

学校における児童・生徒の安全管理に関し必要な事項を定めた「学校保健安全法」がありますが、外国人学校や不就学の子どもは、この法律の適用対象外に置かれているのが現状だそうです。このコロナ禍で外国ルーツの子どもが更なる影響を受けているであろうことは想像に難くありません。



<引用元:国際連合広報センター>

いかなる言語的・文化的背景を持っていても子どもは国の宝です。

小島先生の話を知って、外国ルーツの子どもが、安全安心な環境で健やかに教育を受けられる状況を一刻も早く創出する事が急がれると感じました。

(文責：戎妙子)

学会からのお知らせ

2021年度の役員は以下の通りです。

役職	役員
顧問（学会）	竹内 理研究科長・学部長・教授
顧問（総務委員会）	守崎 誠一研究科学務委員長・副学部長・教授
顧問（紀要委員会）	池田 真生子研究科教学主任・教授
会長	吉田 信介教授（英語）
財務委員長	*名部井 敏代教授（英語）
監査	沈 国威教授（中国語）
	今井 裕之副学部長・教授（英語）
幹事長	山中 由香（英語）
総務委員会	*近藤 睦美（英語） 楊 馳（中国語） 野村 正樹（英語）
財務委員会	岩田 弥生（中国語） 神道 美映子（中国語）
研究大会委員会	*竹田 里香（英語） 上野 舞斗（英語） 浜谷 佐和子（英語）
広報通信委員会	*戎 妙子（日本語） 山本 祐太（IT）（英語）
紀要委員会	*尹 惠彦（朝鮮語・日本語） 川光 大介（英語）

（*委員長）

<編集後記>

コロナ禍で順延となっていた研究大会を委員会の皆さんの頑張りによって無事開催できました。

研究会・研究大会を企画するにあたって、委員会の皆さんは、校種や教えている言語の違いを問わず、外国語教育全般に資する会にすることを常に意識してくれています。私自身は日本語教育に携わっているのですが、自分が所属している日本語関係の学会では得られない多くの学びと刺激を受けています。

企画に始まり、登壇してくださる先生方との交渉や調整から会の運営に至るまで、尽力してくれている研究大会委員会の皆さんに改めて感謝の意を表します。